日本中世における身体技法について

——身体の姿勢を中心とした試論——

横出洋二

はじめに

健康ブームと言われて久しい。最近では健康食品以外の通常食品に栄養素を特別に加味した商品が多く販売されているが、それは現代の日本人の健康に対する関心の高さを反映している。

またスポーツをして健康維持をはかる人も最近多い。スポーツジムで老若男女関係なく水泳やエアロビクスなどで汗を流したり、マラソンを日課としたりする人も多い。各地でマラソン大会が開かれるとたくさんの参加者で賑わい、中には一〇〇キロマラソンといった苛酷なものに挑戦する人も少なくない。

こうしたスポーツを通じて太り過ぎ、脂肪過多、腰痛、体力増強など健康維持、増強を図るわけだが、しかし最近では健康以上に体型維持を目的とする場合も多い。ジムのロッカールームの鏡の前で若者は日々鍛えられる身体をナルシスティクに眺め、中年は意志に関係なく貯まる脇腹の脂肪をつまむ。そうしたしぐさに、健康嗜好も含めて最近の自己の身体そのものへの関心の高さがうかがえる。

以上の傾向はマスコミや企業戦略による過剰な健康・身体維持の情報提供による個人の身体への介入も要因の一つであるが、他に村落協同体や「家」の崩壊による現代社会の中での個人の孤立も自己や自己の身体への関心の高めているのではなかろうか。共同体なり家の中で個人は有機的に絡った存在であり、その身体は所属集団のものでもあり、個別的な一個人に属するものとしての意識は薄かったのではないかと考える。現在は心身を埋没させる共同体的集団はなく学校から家庭の中まで個人は孤立を意識し、さらに

は個性豊かで独立した人格が称賛され、他者と同じが否定される風潮、またそうした教育が推進される中で自己や他者のまなざしに対し過敏に意識せざるを得なくなっている。

一　身体史へのアプローチ

さて、そうした身体への関心は歴史学の中にもうかがえる。それは一〇年ほど前からの「社会史」や「女性史」の活発な研究活動の流れの中で身体に関する論文が書かれるようになったことに示されている。たとえば、中世史研究では、黒田日出男氏が八〇年代早くから絵巻を資料として中世人の身体感覚に関する論考をいくつか発表している。[1] そして代表的な学術雑誌である『日本史研究』においても九〇年代以降身体レベルの論文が掲載されるようになり、一九九三年には女性論の特集が初めて組まれ、身体レベルでの女性史に関する論考がいくつか掲載された。[2] また一九九四年には歴史学・社会学・文化人類学・民俗学・国文学・医学など学際的に性差の問題を共同研究してその成果を各分野にわたる論考として掲載した『ジェンダーの日本史 上 ―宗教と民俗　身体と性愛―』・『同　下　―主体と表現　仕事と生活』が上梓され上巻では特に女性の身体に焦点を当てた論考が掲載されている。[3] 最新刊の岩波講座『日本通史』や『日本の近世』でも、身体に焦点を当てた論考が掲載されている。[4]

このように現在、身体に関する研究が盛んになされているが、それ以前の特に七〇年代までの歴史学においては、一個人の身体のことは単なる風俗的なことで社会変革に直接関係ないことがらとして学問の主要な研究テーマとはならなかった。これに関して、荻野美穂氏は「身体史の射程に―あるいは、何のために身体を語るのか―」おいて次のように述べている。[5]

> 政治史、経済史、思想史を中核として形成される歴史学を支えてきたのは、世界を公と私、政治と日常、生産と再生産、抽象と具像、文化と自然といった一連の二項対立図式によって分類し、このうち前者のみを真に重要な領域とみなして学問研究の対象としての価値をみとめるという前提である。

つまり、身体とは日常レベルのものであり、歴史的に不変で自明のことであるため、日常レベルのことに学問的な問題として価値をおかず、また「変化を研究する学問である

歴史学にはなじまない」超歴史的なあるいは没歴史的なこととして研究されなかったということである。

しかし、身体は各時代の社会の在り方に強く影響を受けるものであり、身体の歴史学的アプローチは、各時代の社会の中での個人の在り方、生き方を探り、同時にその社会全体の特徴を明らかにし、また従来の政治や経済史の見方にも新たな知見を開くことになるのではないだろうか。

二　時間・空間における身体技法

イ、時間・空間と身体

さて、没歴史的で自明のことと思われている身体も各時代の社会や文化に規制されている。荻野氏は前掲論文でドイツ出身の歴史家バーバラ、ドーデンの身体に関する説を引用しながら、身体は、時間と空間が異なるそれぞれの社会と文化に規制され、研究者自体も近代社会の人間像に規制された近代的身体を持っている。そして身体であるゆえ意識されないまま過去・異文化の身体を研究しようとするとき自分の持っている近代の身体尺度と感覚と認識とで判断してしまい、それが大きな落とし穴になるという。

私も身体の感覚や動作は時代と地域によって異なり、それはその社会の在り方と文化が作りあげるものだと考える。そこで今回は日本中世の人々の身体を取り上げ、近世・近代の人々の身体との違いを考察したいが、もう少し身体に関する研究動向をみておきたい。

ロ、身体史研究

先に述べたように最近身体に関する研究が盛んである。しかし女性史研究の側からの研究が中心であるためか、男女の性差をめぐる身体の問題が中心になっている。特に女性という性の身体を持っているゆえに起る社会的規制・抑圧や、それを起こさせる社会特に男性中心社会の持つ文化的意識を問題とする場合が多い。[6] その他、各時代の人々が自分の身体全体や細部をどう意識したかという意識のレベルでの研究もみられるが、[7] 身体そのもの、肉体そのものを取り上げたものは少ない。

また黒田氏の論考でも、中世の人々のしぐさ・行為を取り上げているが、[8] ここでは、たとえば足をなめるという場合、足をなめる行為の背景にある人々の宗教的な意識の面に主たる論究の中心がいっており、[9] 他では持ち物・衣装・仕草によって当時の身分の在り方の具体的な実相にせまろ

うとしていて、身体そのものへの言及はない。人々の身体への感覚や意識も重要であるが、身体史研究という面でみた場合、それだけでは不十分である。身体を問題にする場合、中世社会が文化として刻見込んだ身体の形や動きの近世以降と異なる特徴をも問題とし、当時の社会・文化との関係や影響を明らかにしなければならない。その特徴をつかむことで逆にその時代の社会や文化の特徴がみえてくるのではないかと考える。

ハ、身体技法

現在の私たちが持つ身体にたいする形而上的イメージを除いて身体とは何か考えた場合考えられるのは身体の機能的な働きである。つまり、腕と手は主に物を掴み、持ち、触るためにある。足は立つことと、AからBへ移動するための機能を持つ。つまり人間が意志あるいは無意識に何かの目的を果すための道具として身体がある。

そしてこうした身体の日常的な機能の仕方には時代差と地域差がある。文化人類学の野村雅一はギリシャの牧畜民の調査から、牧畜民は羊の監視などの労働から長時間立つことに慣れており、一本の杖で立ったまま長く休むことができ、立ち話も得意である。それに対し、日本人は「立ったままからだを休めるしぐさに今日でもまだあまり習熟していないように思える」とのべ、電車・バスに乗るとすぐ座りたがるのもそれによると思われるといい、「これは日本人の生活の伝統のなかにいまのように背筋をのばして立っている場面がなかったということと関連があるだろう」と述べている。逆に座るのは日本人はたけており、西洋人のようにイスなどの補助具なしに体を安定させて座ることができるという。つまり立つ・座るというのも技術であり、それは民族間による違いがあるということである。[10]

こうした身体の技術については、フランスの人類学者マンセルモースが早くに指摘している。第一次大戦に参戦して、フランス軍の歩調とイギリス軍の歩調が違い、歩調が合わないなどの諸例を上げて身体の使い方の違いを述べ、こうした身体の技術を「身体技法」と呼んだ。そして身体技法は生得的なものでなく、その社会・文化の中で身につけていくものであり、それゆえ他の社会で身につけた人との違いが生まれてくると述べている。[11]

一般的な例ではないが、身体技法が後天的に身につくものという例として、職人の場合がある。単に道具の器用な使い方だけでなくたとえば立ち方、座り方にも職種ごとに

図1

独自のものを身につける。筆者が調査した鋲を作る鍛冶屋の場合、図1のように座して仕事をするが、そのとき片方の足をのばして足首を動かしてフイゴのレバーを操作し、片足は折り曲げ、その状態でツチ・ハサミを使って鋲を作っていく。最初は慣れないため足がいたく、それがため止めていく弟子もいた。しかし、慣れてくるとその姿勢で何時間も仕事をすることができる[12]という。このように座すという特定の姿勢を保つのも習熟を必要とする技術である。そこで本論では、中世における身体技法の一つとして、人の立ったときあるいは歩行のときの姿勢に焦点を当て、近世以降とは違うその時代の特徴を考察してみたい。

三　中世人の姿勢と歩行

イ、一遍上人絵伝に描かれた歩行と姿勢

中世の人々の一般的な姿勢を知ろうとした場合、当時の主たる史料である古文書だけからは中々うかがうことは難しい。古文書や文献にはほとんど無意識の行為である立つなり、歩くなりの様子を、よほどその個人に特徴的なものがないかぎり記述されることはない。そこで、最近よく活

用される絵画資料に頼らざるをえない。絵巻など絵画図資料は、絵画独自の技法や作者の技量や個性が反映され、かならずしも実際の情景や風物をリアルに描ききっているか問題があるが[13]、しかし、一般民衆の仕草や表情の細かいところまで描き分けており、写真のない当時にあって現在の私たちに中世社会の細部を伝えてくれる重要な資料であることはまちがいない。

そこで今回は『一遍上人絵伝』をテキストに、そこに描かれた人々の姿勢と歩行を観察し、考察してみたい。中世にはいくつもすぐれた絵巻が残されているが、その中でも『一遍上人絵伝』が最も多くの人物を広い階層にわたって描いており、それを統計的に見ていくことで当時の平均的な姿勢の特徴が浮かび上がるかもしれないとして選んだ。

周知のことではあるが、絵伝に関して述べておくと、一遍没後、弟子の聖戒の発願で、一遍の生涯を各地の遊行地を遍歴する流れにそって描いているもので、全十二巻の巻子本である。奥書には正安元年（一二九九）の記載がある。

さて、観察に当たっては、中央公論社の日本絵巻二〇『一遍上人絵伝』（一九八八）を利用し不鮮明なところは同社の日本絵巻大成の『一遍上人絵伝』を見た。観察する人物は立っている、あるいは歩行している人で、そのときの姿勢を中心に観察した。しかし、下半身が他の人物や建物などの後で描かれていないものは除いた。その観察の結果を表にしたものが、表1である。人物一人一人に対して、歩行しているのか、立ち止まっているのかを区別し、そのときの姿勢を背を伸ばしている（A）、前かがみになっている（B）、そしてもう一つ猫背（C）に分けて記し、また顔が前・後・横のどの方向を見ているかも記した。また、手に荷を持つ、あるいは背負うなども姿勢との影響で記載し、履物の有無についても記しておいた。

さて、表1に掲載した人物は六八五人で、内訳は男二七五人、僧二〇七人、女一二〇人、尼一九人、子供四三人、不明一一人である。次に第1表からさらに前を向いて立っている、あるいは歩いている場合だけ集計したのが第2表である。後を向く、または上や下を向くの行為は姿勢をくずすので、自然に立ったときの姿を追求する本論では除き、そうした行為の分析は別の機会に譲りたい。そして、同表ではさらに子供と不明を除き、さらに僧は男に、尼は女として合算した。その結果は男四八二、女一四九人で、次にこの男と女を立ち姿と歩行状態に分け、さらに姿勢の状態

と持ち物の有り様について分けて集計した。この表の分析は以下のとおりである。

表2のまず立っている場合を見た場合、男女合わせて背が伸びている場合（A）は六七、前屈み（B）が三〇、猫背（C）が五である。Bの場合会釈・船頭が船を漕ぐ・桶を抱え持つ・人に被さる・舞楽を舞う・人を止めにかかる・老婆など動作や年令にともなう要因が十七あり、それを引くとBは一三人となる。そのBとCを合わせた数はAの約五分の一で、Aの方が多い。男女別に見た場合（Bになる要因は除く）、男A四六：B・C一五、女A二一：B・C5と、AはB・Cの男約三倍、女約四倍であり、女の方がAの状態である場合が多い。持ち物については手に持つ場合が三〇でほとんどであり、それ以外は一二で、かたぐ・背負うは計三で他は太刀を腰にさすその他である。立っている場合においては姿勢に影響するような運搬法はほとんど描かれていない。

次に歩いている場合を見てみる。背を伸ばしている（A）一二八人、前屈み（B）九七人、猫背（C）一〇人である。Bの場合、老人・筏の綱引き・拝礼・前の人物への語りかけ・踊る・舞う・縁に上がるなどの動作等でBの姿勢になっている二三人を除くと七四人である。AはB・Cの合算の一・五倍と、歩行を描いている方が立っているそれを描いた場合よりAの方が割合が低い。男女別に見た場合、男A八八：B・C（動作等でBになる要因の者は除く）八〇、女A四〇：B（同）一四人と、男の場合AはB・Cとほぼ同じ、女は約三倍であり、女の方がAの状態である場合が多い。

持ち物項目を見た場合、手に持つというのが立前と同様多いが、ただ立前と違うのはかたぐ・荷なう・背負う・頭上といった運搬をしている割合が多い。手に持つ以外の運搬は歩行において多く描かれているといえよう。その内、かたぐ・荷なう・背負うを合算したAとB（Cはない）の割合はA一三：B三九とBが三倍多い。そしてAの方には笈・櫃とか重量のあるものが含まれておらず、荷ない棒はまったくない。重量のあるものを運搬する姿勢はほとんどBの姿勢を物理的にとるものとみられる。そこでこの三種の運搬法を除いてA・Bを比較した場合、A一一四：B三五でAは約三倍以上ある。これから歩行においても背を伸ばした場合が多かったと見られる。次に男女差を見た場合、三種の運搬法は、女がAでかたぐ一・背負う二の計三例だ

けで後は男だけである。三例の内、二例は子供を背負っている場合である。以上のことから肩と背を使った運搬法は男にとっての運搬法であり、女にとっては一般的ではなかったといえる。逆に女だけの運搬法が頭上運搬であり、表二には立と歩行で五例あるが、これはみな女であり、しかも姿勢はみなAである。つまり頭上運搬は女に一般的な運搬法であり、運搬のときは物理的に背を伸ばす必要からAだけとなったと考える。頭上運搬については次節でもう少し考えてみたい。

さて、表の分析結果を見てきたように中世の人々は、何か特別な動作をとらず、自然に立っているときや歩いているときは比較的背をまっすぐ伸ばしていたと考える。

この結論を「中世においては」とする場合、近世・近代の日本人と比較しなければならないが今回なにがしかの比較できるような統計的な資料を提示できないのではっきりとはいえないが、以下、若干の資史料から近世以降の場合のみとうしを述べてみたい。

ロ、近世以降の姿勢と歩行

明治一一年（一九七八）に日本の東北・北海道を旅行したイギリスの女性探検家イサベラ・バードは著書『日本奥地紀行』[14]の中で数箇所日本人の身体の印象を述べている。まず横浜に最初に上陸したとき見た日本人について、「小柄で、醜くしなびて、がにまたで、猫背で、胸は凹み、貧相だが優しそうな顔をした連中がいた」（第一信）とその印象を述べている。他でも「日本人のみじめな体格、凹んだ胸部、がにまた足という国民的欠陥」と述べ、また、女性について「女性はとても小柄で、よちよち歩いている。」（第三信）と記している。外国人のバードの目には、当時の日本人の男性は胸が薄く凹み猫背でがにまたであり、女性の歩行は大股でなくよちよち歩いていたように見えた。

明治初期までの日本人（農民）は腰をかがめ、あごをつきだし、四肢がおりまがり、歩くときも膝はまがり、腕はふらずに歩いていたとされる。また、腕を振って歩こうとするとナンバ式の歩き方になってしまった。[16]

筆者の日頃の観察した印象でしかないが、現代においてさすが足を曲げたままがにまたで歩く日本人の姿は少なくなったように思われるが、猫背でやや前屈みに歩く姿勢はあまり変わっていないように見られる。

図2・3は『広益国産考』（安政六年）と『都名所図会』（安政九年）の挿絵の人物であるが、人物は腰を曲げ、足

図3　「都名所図会」

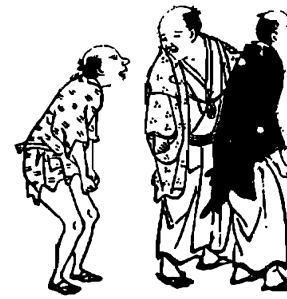

図2　「広益国産考」

図4

を曲げて立ち、あるいは歩いている。これだけの資料だけでは断定はできないが、近世の日本人の男は手や肩に何も所持しないで歩いている場合、侍・農民・商人関係なく、イサベラ・バードの印象のように猫背で、腰を曲げ、やや蟹股で立ち、歩いていた様子が伺える。

以上中世人が背を伸ばして立ち、歩いていたのに対し、近世人は猫背あるいは前屈みで立って歩いていたということが推論できる。いつ頃したこうした変化があったかわからない。図4は近世初頭の珍皇寺参詣曼陀羅図であるが、この図では、人物は腰を曲げた姿勢に描かれていることがうかがえる。その他近世初頭の洛中洛外図の人物も同様な姿勢に描いている。これらから中世末には変わってきていたことが推察できる。

さて、変化の要因については社会変化ぐらいで具体的には漠としてわからないが、ただ要因の一つとして運搬技術の変化が想定される。次節ではその点について考えてみたい。

四　頭上運搬と歩行・姿勢

図5　「北野天神縁起」

イ、運搬法の変遷

表1を見てもらうと、一遍上人絵伝の中で描かれた人物の運搬法には、車・馬・船などの交通手段を除き、人一人が行なうものとしては手で持つ、天秤棒で肩でになう、背中で背負う、そして頭に乗せる方法に大きく分かれる。前者三つの方法は今でも行なう運搬法であるが、頭にのせる頭上運搬法は日本においてほとんど見られなくなった。近代以降では伊豆諸島他、京都の大原女・白川女や徳島のいただき行商など特別な地域のものとなっていた。[16] 現在においてはかろうじて祭礼行事の中で神饌を頭で運搬するといった場面で残されているだけである。しかし、中世以前における女性の運搬法としては相当一般的な方法であった。一遍以外の絵巻においても日常的に頭上運搬をしている姿が多く描かれている。たとえば、北野天神縁起の第八巻の火事の場面で火事から逃げる人々を描いているが、その中で三人が桶や風呂敷（着物を包む）・行李に物を入れて逃げている（図5）。このように火事という咄嗟の出来事のとき物を頭に乗せて逃げるということはそれだけこの運搬法が一般的であったことがうかがえる。

頭上運搬は先程述べたように近世以降も行なわれているが（図3）、ほとんどの地域での人力運搬法は天秤棒による肩になにか、篭・オイコ・紐などを使った背負い運搬が普通に行なわれるようになった。

そのため現在において頭上運搬と姿勢・歩行との関連を具体的に探るのは難しい。ただ奄美大島以南の琉球地方では戦後の極最近まで日常の運搬法として使われ、年配の女性などは今でもちょっとした市場での買物でもそうした運搬を行なっている。そこで次に筆者の調査も踏まえ、琉球地方における頭上運搬法をみてみたい。

ロ、琉球地方における頭上運搬

琉球地方で、頭上運搬を行なうところは地域的な違いがあり、沖縄本島の本部半島の中央より北、つまり国頭地方では頭上運搬はしない。この地方ではティル（篭）の紐を頭の前部に引っ掛けてティルを背負う運搬法をする。一方頭上運搬は本部半島中央より南、先島の八重諸島までこの運搬法を行なう。逆に沖縄の北奄美諸島では沖縄本島に近い与論・永良部は頭上運搬を行い、さらに北の徳之島・奄美大島は頭部に紐を掛ける運搬をするというように違いがある。[18]

さて、生活の中で頭上運搬を行なう場であるが、沖縄本

島の東南沖合にある知念町の久高島では、水汲み場からの水の運搬のとき頭上運搬した。島には五つのガーと呼ぶ水汲み場が島の西海岸沿いに距離を置いてある。一番から五番までの番号がついており、三番のガーを飲料水として使い、他は洗濯場として使った。各家の屋敷には井戸がないため、飲料水と洗濯はすべてガーを利用した。三番のガーで洗濯すると罰っせられるほとガーの水は貴重であった。このガーから飲料水を家に運ぶときは桶に水を入れ、頭に乗せ家まで運んだ。頭にはタオルを巻いて桶を乗せ、一日に多いときで三回運ぶこともあった。だいたい十一、二才のころ頭上で水を運ぶようになったが、フィリッピンで育ち、戦後二十歳過ぎて島に帰ってきた年配の女性は、帰ってから頭上運搬を始めたため、中々できず、人に手伝ってもらって練習したという。このように運搬というのが後天的に獲得される一つの技術であったといえよう。

沖縄本島の具志川市住で同市豊原育ちの喜久山サダさんは、豊原では屋敷にカー（井戸）があり他から水を運んでくることはなかったが、畑から作物を運ぶとき頭上運搬を行なった。サトウキビのような長いものは肩で運んだが、赤芋はバーキ（丸い竹篭）に入れ、ササゲ（頭上運搬）で家まで運んだという。芋を入れた篭は重いのでいっきには頭にササゲることはできない。たいたい跪いて、まず膝に篭を乗せ、次に肩、そして頭に乗せたという。だいたい十五歳くらいから頭上運搬をするようになったという。かなり重いものを持つ場合は人手を必要とした。

図6　店屋物を運ぶ女性
（糸満市）

沖縄本島糸満市は漁師町として有名であるが、ここの漁師の嫁は家の男が獲ってきた魚を買い、魚たらいに魚を入れて頭に乗せ行商して売り歩いた。頭上運搬は以上のような水汲み・畑作物運搬・行商というように特定の労働だけでなく、図6のように日常的なちょっとした物の運搬でも習慣として行なっている。

さて、沖縄でも頭上運搬は女が行なう運搬法である。久

高島の古老の男性は、男も頭上で水運びをしたが、男はフラフラして巧く運べず、水をこぼしたという。そのことから女が頭上運搬が多いというのは身体の違いによるのではないか推測される。腰が大きく下半身が安定して重心の低い女の方が頭に物を乗せ、歩くのにたやすいことが考えられる。前節でみたように中世の絵巻で頭上運搬を行なっているのがほとんど女であるのはこういった理由からではないか。逆に肩を使うのは男である。中世の場合、男は日常的に烏帽子を被るため頭が使えないこともあるだろう、しかし男の方が肩が発達して荷ない棒を荷なうとか、笈や篭の紐を肩に掛けるというのがたやすいという身体的な特徴にもよるのではないだろうか。このことは今後の課題として残る。

さて、次に頭上運搬と姿勢との関係についてだが、まず、二〇年近く奄美大島で鹿児島県立図書館奄美分館長として生活し、生涯琉球・沖縄を愛し、見つめてきた小説家の島尾敏雄は沖永良部島の女性について次のように述べている。[19]

女の人は、一日の仕事として暗河（クラガー＝水汲み場）にいって、そこで身体を洗い、ものを洗い、おしゃべりをして、そうして今度は桶に水を入れて頭に乗せてまた家に帰って来る。大変難儀ではあるけれども、そこにね、「生活」があったんですね。

このように沖永良部島でも女性による頭上運搬が行なわれていたことを記し、つづけて

暗河と言ってもどこにでもあるわけじゃなくて、沖永良部島が中心になるんですけど永良部の女の人たちの姿勢は非常に良かったですね。

と述べ、頭上運搬との関係は直接述べてはいないが、文脈から姿勢のよさを頭上運搬と関連づけていることが読み取れる。また「川にて」という短篇には次のように叙述している。[20]

女たちが大型の壷や桶を頭の上にのせて、胸をはりゆったりした態度で、腰をおうように振りながら行き来していた。

（略）

その姿勢は彼女たちの目もとをきまじめに見せた。目の高さで前を見つめさせ、わき目もゆるさないからだ。多くはその固定した目付ですれちがって行くが、中にはQにとも私にともなく送る挨拶のため、胸から上をまっすぐにしたまま軽くひざを折って行く女もいた。

以上の島尾の記述から頭上運搬では、背を伸ばし、やや胸を張り、まっすぐ前を見て歩行していたことがうかがえる。

次に頭上運搬と姿勢の関連について筆者撮影の写真資料からみてみたい。まず図7の頭上運搬の立ち姿であるが、背をやや反りぎみに伸ばして立ち、顔も顎を引いたり傾けたりせず、まっすぐ見る。荷は頭頂より少し前に乗せるため、顎は気持ち前に出すような形になる。図8は小さく判りにくいが、頭上運搬で歩行しているときだが、背をぴしっと伸ばし腕を大きく振り、外股で歩く。

図9・10は知念村の馬天港で久高島行きの船の乗船を待っ

図7　（知念村普天馬港）

図8　（糸満市）

図9　船の乗船を待つ女性
（知念町普天馬港）

図10

図12　（知念村久高島）

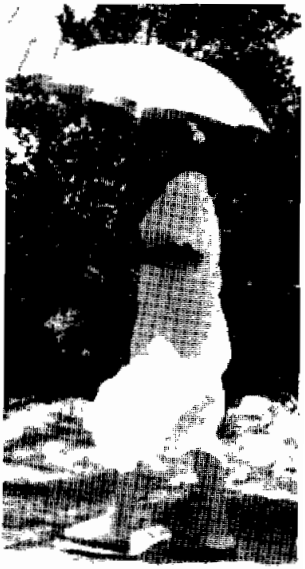

図11

図13　腰の曲った日本本土の老婆（京都府相楽郡山城町）

ている二人の女性だが、図10のように頭上運搬しないときも反りぎみに姿勢を伸ばし、顎を引いたり、うつむいたりしない。図11・12は久高島の老婆であるが、やはり背を伸ばし、うつむかず、伏し目がちに下を見る。図12の老婆は足は弱っているが、膝を伸ばし背は伸び、腰は曲がっていない。

以上のように沖縄では、頭上で物を運搬する場合は、当然姿勢をまっすぐ伸ばしそれを保ちながら歩かなければならない、また足さばきも内股では上体が揺れ安定しないので、外股での歩行が必要となる。そして常にこうした運搬を行なうことが、単に頭上運搬せずに立ち、歩行している場合も同様な姿勢になる一つの要因と考えられる。また伏し目になるのも頭に物を乗せている場合、首を傾けられないことによるのではないだろうか。

ハ、絵巻に描かれた頭上運搬

最後に再び中世の頭上運搬と姿勢について見てみたい。図14は三人の女性が頭上運搬をしているが、ともに背を伸ばし、顔は前を向きまっすぐに保っている。特に中央の女は年をとっているが姿勢のよさが注目される。また左端の女は沖縄の図7・12同様な布の巻き方をしており興味深い。

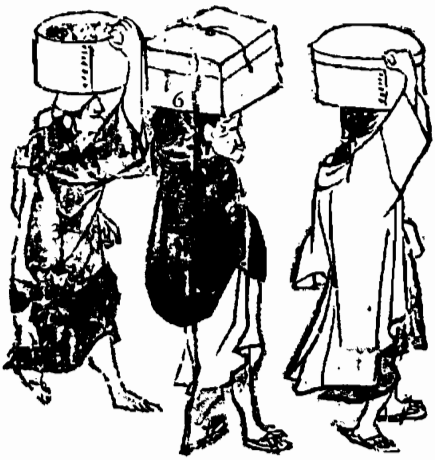

図14　「一遍聖人絵伝」

図15　「一遍聖人絵伝」

図16　「石山寺縁起」

図18　「直幹申し文絵詞」

図17　「春日権現」馬検記

図15では箱（折櫃?）を頭頂よりやや前に乗せ、顎を少し前に出している。絵巻には図16のように頭上運搬をする男も描かれている。頭上運搬の男の背が伸び、対照的に肩でになう男の背は曲がっており、運搬と姿勢との関連がみられる。それと図16のように絵巻で頭上運搬する男は僧侶など剃髪した者である。それは横の男の頭の髻や、一般に烏帽子を被る習慣が頭上運搬には邪魔になるためかと考える。図17では、髻をせず、烏帽子も被らない子供は建築部材を頭にかついで歩いている。つまり、頭上運搬は男でもなにげなくする運搬法であるが、大人になり頭が塞がることで行なわれなくなると考える。図18は男の幼児が遊びで篭を頭に乗せ歩いている。これは親の運搬を遊びでまねているのだろう。赤ん坊は母親の動作に身体を共鳴させ、同じ所作をするが[21]、日常の歩行や姿勢というのも親の所作を自然とまねることで身につけるのだろう。絵巻に描かれた頭上運搬しない成人の男も比較的姿勢がよいのも子供のときに親や周囲の大人の姿勢に共鳴させ身につけた結果と考えられないだろうか。

おわりに

人が立つ・座るなどなにげない日常的な動作も一つの身体的な技術であり、それは民族・地域間で違いがあると同時に、歴史的な相違もあるのではないかという観点から絵巻を資料として中世の人々の姿勢の在り方について考察した。結果、中世では立ったときや歩行のときの姿勢は、近世・近代の日本人と違い背筋をまっすぐ伸ばしていたと考えた。そして特に女性の姿勢はよくその要因として、頭上運搬の影響を考えた。

しかし、以上の考察を結論とするには、絵巻という作者の技法が影響する資料に頼り、また一遍上人絵伝という一資料だけの分析だけであるため今後の研究の進展を待たなければならない。

冒頭に現代の日本人が身体のスタイルを気にすると述べたが、今だに若者も含め猫背で貧相な姿勢でうつむきながら歩き、立つ場合が多い。これは他者の目を過敏に意識する日本人の精神的な特徴[22]が影響していないかと思われる。姿勢の在り方は単に労働など身体の運動だけに要因を求めるのでなく、時代間における身体感覚の違いなど心理的な

影響も考えてみる必要もあろう。

記

(1) 『姿としぐさの中世史』(平凡社、一九八六)
(2) 『日本史研究』三六六号、一九九三
(3) 東京大学出版会、一九九四・一九九五
(4) 倉地克直「自然と人間、からだとこころ」(『日本の近世』第一六巻民衆のこころ、中央公論社、一九九四)・「性の文化」(『日本通史』第一四巻近世四、岩波書店、一九九五)
(5) 注2前掲書
(6) 注3前掲書上巻「Ⅱ身体と性愛」
(7) 注4倉地克直「自然と人間、からだとこころ」
(8) 注1前掲書
(9) 注1前掲書「異香」と「ねぶる」
(10) 野村雅一『しぐさの世界―身体表現の民族学―』(日本放送出版会、一九八三)
(11) 『社会学と人類学Ⅱ』(有地亨・山口俊夫共訳、弘文堂、一九七八)
(12) 拙稿「今井家寄贈鉄鍛冶屋道具について」(『山城郷土資料館報』第一二号、京都府立山城郷土資料館、一九九四)
(13) 絵画史料の扱いの難しさについては一遍上人絵伝・絵師草紙を素材にして、黒田氏と藤本正行・五味文彦氏との間でするどい論争が繰り広げられている。
藤本正行「入水する時宗と結縁衆」(『月刊百科』三一六、一九八九)、黒田日出男「『一遍上人絵』の原本と模本」上・下(『同』三五三・三五四、一九九二)、藤本正行「『一遍聖絵』の解釈をめぐって」『日本歴史』五五四、一九九四)、五味文彦「絵巻の方法」(『思想』八三七、一九九四、また角山幸洋氏も「製糸をする姿勢」(『民具マンスリー』)神奈川大学日本常民文化研究所二七二、一九九〇)において座繰りの姿勢を描いた近世の絵と実際とが違っていることを指摘し、絵画資料への依存に注意を促している。
(14) 東洋文庫二四〇、平凡社、一九七三
(15) 注10前掲論文
(16) 『日本民俗学体系』五　生業と民俗、(平凡社、一九五九)、森本嘉訓「いただき行商関係用具」(『民具マンスリー』第一八五号)、京の女性史研究会編『京の女性史』京都府、一九八五)
(17) 近世の各地の名所図会で頭上運搬を描いているのは非常に少ない。
(18) 上江洲均『沖縄の暮らしと民具』(慶友社、一九八二)
(19) 「綾蝶生き魂」(『島尾敏雄対談集　ヤポネシア考』、草書房、一九七七)
(20) 『島尾敏雄全集』第五巻、(晶文社、一九八〇)
(21) 村瀬学『未形の子供へ』(大和書房、一九八九)
(22) 内沼幸雄『対人恐怖』講談社現代新書、講談社、一九九〇)

表1　一遍上人絵伝における人物の姿勢一覧

凡　例

表は一遍上人絵伝に描写された個々の人物の立っているときの姿勢の状態を、関連する項目に分類して記したものである。テキストは中央公論社の『日本の絵巻　20　一遍上人絵伝』(1988) を使用した。それぞれの人物はページ順に、また右から左を基本に観察した。ただし、下半身が描写されていない人物は立っているかどうか判断がつかない場合があるので今回は除いた。各項目の要項は以下のとおりである。

人物　男・女・子供（子）・僧・尼とだけに分類し、武士・百姓など身分による分類は判断がつかない場合も多いので行なわなかった。僧については、在家の百姓もいると思われるが、一応坊主頭は僧に分類した。子供の中には稚児も含め、稚児と思われる場合は備考に記した。船の乗員は梶取・水主といるが、一様に船頭と備考に記した。

足　人物の足の状態を記したもので、立っている（立)、歩いている（歩)、走っている（走)、に分類した。

顔　顔の向きを記したもので、前を見ている（前)、後を見ている（後)、下を見ている（下)、上を見ている（上)、に分類した。

姿勢　背筋の状態を記したもので、真っすぐ伸びている（A)、前屈みになっている（B)、猫背になっている（C)、に分類した。

持ち物　手、肩、背に身に付けている物を記した。但し、被っている物は除いた。物が不明な場合は荷と記した。篭で足の付いたものは笈に分類した。

履物　履いている物について記した。不明な場合は？とした。

備考　持ち物の持ち方をまず記し、その他姿勢に関わることなどを注記した。

巻数	頁	人物	足	顔	姿勢	持ち物	履物	備考（持ち方など）
巻1	7	男	立	前	A	扇	草鞋	手に持つ
		男	立	前	A	－	草鞋	
		男	立	後	A	－	草鞋	
		僧	歩	下	B	傘	草履	
		僧	歩	上	C	－	?	子供、僧を見上げる。
		僧	歩	後	A	傘	?	かたげる。
	9	僧	歩	前	A	－	?	
	10	男	歩	前	B	鋤	裸足	かたぐ。
	12	僧	歩	横	A	笠	裸足	かたぐ。
		男	歩	前	A	荷ない棒	裸足	荷なう。篭・箱・薬を棒にくくる。
	13	子	歩	前	A	－	裸足	
		男	歩	下	C	棒	?	唐櫃二人で棒でかつぐ。
		男	歩	前	C	棒	?	同
		男	歩	後	C	たずな		引っ張る。

	子	歩	前	B	たずな	草鞋	もつ。
	男	歩	上	B	たずな	?	引っ張る。
	男	歩	後	A	弓矢	?	かたぐ。
	男	歩	下	B	たずな	?	ひっぱる。
	僧	歩	上	A	棒	?	持つ。
	僧	歩	前	B	幣?	?	両手で持つ。
	僧	歩	前	A	−	?	
14	男	歩	前	B	蓑・杖	?	杖つく。
	男	歩	上	B	荷ない棒	?	荷なう。行器二つくくる。
	女	歩	?	A	杖・赤子	裸足	杖つく。赤子かかえる。笠かぶる。
19	僧	歩	下	B	笈	草鞋?	背負う。
	僧	歩	下	B	笈	?	
20	僧	歩	横	A	−	下駄	
	僧	歩	下	C	笠	草鞋	手に持つ。
	僧	歩	前	A	笠	?	背負う。
	僧	歩	前	A	傘	草鞋	かたぐ。
	僧	歩	前	C	笠	下駄	かたぐ。一遍。
22	男	歩	下	B	荷ない棒	裸足	荷なう。俵・箱・笠・篭くくる。
	男	歩	下	B	鞭	?	手に持ち、馬たたく。
23	男	走	前	B	棒	?	かたぐ。
	男	走	下	B	荷ない棒	草鞋	荷なう。唐櫃・篭?くくる。
	男	走	前	A	棒	?	かたぐ。
	女	立	前	B	−	?	戸外の僧に会釈?
	僧	立	前	B	?	裸足	戸内の女に語りかける。?
24	尼	歩	下	B	−	?	案内の子供を見下ろす。
	子	歩	後	B	−	裸足	後の尼を見上げ、前方を指し示す。
	男	歩	前	B	太刀	?	腰にさす。前の男と話す。
	男	歩	後	B	蓑・太刀?	?	手に持つ。
	僧	歩	前	B	−	草履	前の僧と話す。
	僧	歩	後	B	−	下駄	後の僧と話す。
	女	立	前	A	−	?	拝む?
	僧	立	前	A	笠	下駄	背負う。
	僧	歩	前	C	−	?	
	僧	歩	前	A	笈・笠	?	背負う。
	僧	歩	後	B	笠・数珠	草鞋	かたぐ。持つ。
	尼	歩	前	A	−	?	
25	僧	歩	前	B	−		
	僧	歩	前	A	−	?	一遍
26	僧	歩	後	A	琵琶・杖	?	かたぐ?杖つく。琵琶法師。
	僧	歩	前	B	−		

巻2	39	僧	歩	上	B	－	裸足	梯子を登る。
		男	歩	下	B	－	裸足	梯子を登る。
		男	歩	下	B	－	裸足	部屋の中。
	40	僧	歩	上	B	－	裸足	梯子を登る。
	41	僧	歩	上	B	－	裸足	梯子を登る。
	44	女	立	前	C	－	?	柱に寄掛かる。老女か。
		女	立	前	C	－	裸足	柱に寄掛かる。老女か。
		僧	立	前	A	－	裸足	
		子	立	前	A	－	?	
		女	立	前	A	－	裸足	
	45	僧	歩	後	B	笈	草鞋	背負う。
		僧	歩	前	A	－	草履	草履が短い。
		僧	歩	横	A	－	草履	
		僧	歩	前	A	－	草履	子供。
		僧	歩	前	A	－	下駄	一遍。
	47	僧	歩	後	A	笠	草履	背負う。
		僧	歩	下	B	笈（篭）	?	背負う。
		僧	歩	前	A	－	草履	すり足？
		僧	歩	前	A	－	?	子供。
		僧	歩	前	A	－	下駄	一遍。
	50	女	歩	前	A	－	?	
		女	歩	前	A	－	?	
		女	歩	前	A	－	?	
		女	歩	前	A	子供	?	前で抱く。
		女	歩	前	A	－	?	
		男	歩	後	B	傘	?	かつぐ。
		子	歩	前	A	－	裸足	
		男	歩	前	B	太刀	?	かつぐ。
		男	歩	前	B	櫃？	裸足	背負う。
		男	歩	前	A	弓矢	草鞋	弓－手に持つ。矢－背負う。
		男	歩	前	A	太刀	裸足	腰にさす。
		男	歩	前	A	－	裸足	
	51	尼	立	前	A	－	裸足	
		女	歩	前	B	－	裸足	前の女に語りかける。
		女	歩	後	A	－	?	後の女に語りかける。
		僧	立	前	C？	－	?	
		男	立	前	A	－	裸足	
		僧	歩	後	B	－	裸足	
		僧	歩	前	A	扇子？	裸足	
		尼	立	後	A	－	?	

	僧	立	前	C	−	?	前の尼に語りかける。
	男	立	横	A	−	?	
	女	歩	後	A	−	裸足	後の女に語りかける。
	女	歩	前	A	−	?	
	男	歩	前	A	弓・太刀	裸足	弓−手に持つ。太刀−腰にさす。
	男	歩	前	A	−	裸足	
	男	立	前	A	−	裸足	
	男	歩	前	C ?	太刀	裸足	手に持つ。稚児。
	男	立	前	A	−	?	
	男	立	横	B	−	?	両手を開いて上げ、おどける。
	男	立	上	B	−	裸足	両手を開いて上げ、おどける。
	尼	歩	後	A	−	草履	
	男	歩	前	B	−	裸足	鉢巻き、腰に赤い紐つけ両手を合わす。
52	女	歩	前	C	−	?	鉢巻き、両手を合わす。
	男	歩	前	A	−	裸足	目隠し、手を出し、松に向けて歩く。
	男	歩	前	A	−	?	手を合わす。
	女 ?	歩	前	B	−	?	市女笠かぶる。
	男	歩	前	A	−	?	手を合わす。
	男	立	横	A	手綱	?	持つ。
	男	歩	前	A	太刀	?	腰にさす。
	男	歩	前	B	櫃・菰	?	背負う。
	女	歩	後	A	桶	裸足	頭上、片手でささえる。
53	子	歩	前	B	−	?	女に向け手を出し、坂を登ろうとする。
57	?	歩	?	B	−	?	
	僧	歩	前	B	笈	?	背負う。
	男	歩	?	B	?	?	かたぐ。
	僧	立	前	B	杖	下駄	杖をつく。
	僧	歩	?	?	−	?	
	男	立	横	A	−	?	
	僧	歩	前	A ?	−	裸足	
58	僧	歩	横	A	−	裸足	
	男	歩	前	B	−	裸足	
60	僧	歩	前	A	−	?	階段。
	僧	歩	前	A	−	?	階段。
65	男	立	前	B	棹	?	船頭・棹をさす。
	男	立	後	B	棹	?	船頭・棹をさす。
	男	立	前	B	棹	?	船頭・棹をさす。

66	男	歩	前	B	笈	?	背負う。
	男	立	下	B?	棹	?	船頭・棹をさす。
67	男	歩	前	A	—	裸足	
	男	立	横	A	—	?	
	男	歩	前	A	—	?	
	女	歩	?	B?	子供?	?	背負う?
	僧	歩	前	A	—	?	
	男	歩	前	A	幣		かつぐ。
69	僧	歩	前	A	—	?	階段を登る。
	僧	歩	前	A	—	?	階段を登る。
	男	歩	前	A	—	?	階段を登る。
70	僧	歩	前	A	—	?	
	僧	歩	前	B	—	草鞋	
	僧	歩	前	B	—	?	子供。
	僧	歩	前	B	—	草鞋	一遍。熊野権現と会ったところ。
	僧	立	前	A	—	?	熊野権現。
	女	歩	?	?	—	?	市女笠をかぶる。
	女	歩	?	?	—	?	市女笠をかぶる。
	女	歩	?	A	—	?	笠かぶる。
	男	歩	前	A	—	裸足	山伏?
	僧	歩	前	A	—	裸足	子供。
71	男	歩	下	B	荷ない棒	?	唐櫃をくくる。
	男	歩	前	A	—	?	
72	男	歩	前	A	—	裸足	
	男	歩	前	A	—	?	
	男	歩	前	A	—	裸足	
	男	歩	後	B	—	裸足	
	女	歩	前	A	—	?	
	男	歩	前	B	—	裸足	
	女	歩	前	A	—	裸足	老婆か。
	男	歩	後	B	松明	裸足	手にもつ。
	男	歩	前	A	—	裸足	
	男	歩	前	A	—	裸足	
	男	歩	前	B	—	裸足	
	男	歩	前	A	松明	裸足	
	男	歩	前	A	—	裸足	
	男	歩	前	B	—	裸足	
	子	歩	前	A	—	裸足	
	子	歩	前	A	—	裸足	
	子	歩	前	B	—	裸足	

		子	立	前	A	−	裸足	
		子	歩	前	B	−	裸足	
		子	歩	後	A	−	裸足	
		子	歩	前	A	−	裸足	
		子	歩	下	B	−	裸足	
		子	歩	前	B	−	裸足	
		僧	歩	前	B	−	裸足	一遍。
		僧	立	下	A	−	?	熊野権現。
	73	男	立	前	B	棹	?	船頭
	79	男	立	横	A	矢	裸足	背負う。
		男	立	上	A	たずな	裸足	手に持つ。
	80	女	立	前	B	−	草履	老婆。
		男	立	前	A	−	?	
		子	立	前	A	−	裸足	稚児
		男	走	前	B	太刀	裸足	手に持つ。
		男	走	後	B	太刀	草履	かつぐ。
		男	立	横	A	弓	?	手に持つ。
		男	立	横	A	−	裸足	
		男	立	前	A	−	草履	
		男	歩	前	B	−	裸足	老人。
		子	歩	前	B	太刀	裸足	稚児。
		女	立	前	A	杖	裸足	手に持ちつく。老婆。
		女	立	前	?	−	?	
	81	女	立	前	B	−	裸足	
		僧	立	前	B	−	裸足	
		女	立	前	A	−	?	
		尼	立	前	A	扇子	?	手に持ち、顔隠す。
	83	僧	立	下	A	紐	裸足	井戸のつるべの紐を引く。
		男	走	?	B	蓑	?	背負う。
巻4	86	僧	歩	下	B	−	裸足	一遍。
		僧	立	前	B	−	裸足	一遍。
		男	立	前	B	−	裸足	
	97	尼	立	前	A	−	裸足	
	98	男	走	前	B	太刀	草履	腰にさす。足半。
		男	走	下	B	弓	草履	手に持つ。足半。
		男	歩	前	B	荷ない棒	?	肩にかつぐ。魚を下げる。
		女	歩	前	A	子供・笠	?	子供を負う。笠手に持つ。
	99	子	走	前	B	−	裸足	
		子	走	前	B	棒	裸足	手にもつ。
		女	歩	前	B	−	草履	老婆？

	子	歩	前	A	―	?	
	男	立	前	A	太刀	裸足	腰にさす。
	男	立	前	A	太刀	裸足	腰にさす。
	男	立	前	B	太刀	裸足	腰にさす。
	僧	立	前	B	―	裸足	一遍。
	男	立	前	B	桶	?	両手に持つ。
100	僧	立	下	B	―	裸足	一遍。
	男	立	?	B	棹	?	棹さす。船頭。
103	僧	歩	前	B	畳	裸足	両手に持つ。
104	僧	歩	前	A	太刀・棒	草履	腰にさし、棒は手に持つ。
105	僧	歩	前	B	杖	草履	杖つく。
	子	歩	後	B	松明	草履	手に持ち、足元をかざす。稚児。
111	女	歩	前	A	桶	草履	頭上運搬
	女	歩	前	A	箱	草履	頭上運搬。老婆?
	女	歩	前	A	桶	裸足	頭上運搬。
113	僧	歩	上	B	―	裸足	踊る。
	男	歩	上	B	―	裸足	踊る。
	僧	歩	横	B	―	?	踊る。
	僧	歩	前	B	棒	?	手に持つ。踊る。
	僧	立	前	A	―	?	
	僧	歩	横	B	―	裸足	
	僧	歩	前	B	鉢?	?	手に持つ。踊る。
	僧	歩	前	B	棒?	裸足	? 踊る。
	男	歩	横	B	―	裸足	踊る
	僧	歩	前	B	棒・鉦?	裸足	手に持つ。
	男	歩	前	A	―	裸足	踊る
	僧	歩	下	B	棒・鉦?	裸足	一遍。
116	僧	歩	下	B	数珠	下駄	手に持つ。一遍。
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	僧	歩	前	A	―	草履	
	僧	歩	下	B	―	草履	
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	僧	歩	前	C	―	草履	
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	僧	歩	後	B	笈	草履	背負う。
	僧	歩	前	A	―	下駄	
	男	立	前	A	―	草履	

	僧	立	前	A	―	?	
	僧	歩	前	B	笠・荷	裸足	笠は肩にかたげ、荷は背負う。
	男	立	前	A	扇子	草履	手に持つ。
	女	歩	前	A	―	?	
	女?	歩	前	C	―	裸足	稚児?
	女	歩	後	B	笠	裸足	手に持つ。
	子	歩	前	B	―	裸足	老婆の手を引く。
	女	歩	前	B	杖	?	杖をつく。
	男	立	前	A	太刀	下駄	腰にさす。
122	僧?	歩	下	B	?	下駄	合羽の下に荷を背負う?
	僧	歩	後	B	笠	草履	手に持つ。
	僧	歩	前	A	笠	下駄	手に持つ。
	僧	歩	下	B	笠	下駄	手に持つ。合羽の下に荷を負う?
	僧	歩	前	B	?	下駄	合羽の下に荷を背負う?
	僧	歩	前	B	荷	下駄	合羽の下に荷を背負う。
	僧	歩	前	B	?	草履	合羽の下に荷を背負う。足半。
	僧?	歩	?	B	?	下駄	合羽の下に荷を背負う。
	僧	立	前	B	―	裸足	
	僧	立	?	B	合羽	裸足	縁で合羽を広げようとしている。
127	男	歩	後	A	―	草鞋?	
	男	歩	前	B	傘・荷	?	笠は肩にかたげる。荷は背負う。
128	男	立	前	B	荷・杖	?	荷は背負う。荷の下に杖を充て休憩。
	男	立	横	A	傘・荷・杖		笠は持ち、荷は背負う。荷の下に杖を充て休憩する?
130	男	歩	前	B	荷ない棒	裸足	肩で荷なう。棒には笈を付ける。
	女	歩	?	A	子供	?	前で抱く。
132	子	走	?	B	―	裸足	
	男	歩	下	B	杖	裸足	杖をつく。
	男	立	下	B	鋤	?	鋤で川の土をさらえている?
	男	立	下	B	―	裸足	川を覗きこむ。
133	僧	歩	前	B	桶	裸足	背負う。
	僧	歩	前	A	―	?	
	僧	歩	前	B	―	?	
	僧	歩	前	C	―	草履	
	僧	歩	前	A	―	草履	
	僧	歩	前	B	笈	裸足	背負う。
	僧	歩	前	?	笈	裸足	
	僧	歩	後	A	―	?	
	僧	歩	下	C	―	下駄	一遍。

	139	男	走	前	B	?	裸足	
		男	歩	前	A	太刀	裸足	かたぐ。
		男	歩	横	B	―	裸足	
	140	女	歩	横	B	荷	草鞋?	手に持つ。
		女	歩	横	B	―	草鞋?	
		男	歩	前	B	太刀	?	手に持つ。
		僧	歩	前	B	数珠	下駄	手に持つ。一遍。
		僧	歩	前	A	―	下駄	
		僧	歩	前	?	―	草履	
		僧	歩	前	C	―	?	
		僧	歩	横	A	―	?	
		僧	歩	前	A	―	?	
	141	男	走	前	B	棒	裸足	手に持つ。
		男	走	後	B	―	裸足	
		男	走	後	B	菰?	裸足	背負う。
		女?	走	後	B	笠	裸足	背負う。
		男	走	前	B	棒	裸足	かたぐ。棒の先には菰?
		男	走	前	B	―	裸足	
		僧	走	下	B	笈	裸足	背負う。
	143	女	立	上	B	―	草履	
		女	立	下	B	箱	草履	頭上運搬。箱を降ろすところ。
		女	立	前	A	桶	―	頭上運搬。
巻6	149	女	立	下	B	草鞋?	草鞋	手に持ち、客に渡そうとしている。
		男	立	前	A	―	?	
		男	歩	横	B	棒	?	かたぐ。
		僧	歩	横	B	笈?	?	背負う。
		僧	歩	前	B	笈	裸足	背負う。
		男	歩	前	B	蓑・棒	?	蓑は背負い、棒は手に持つ。
		僧	立	下	B	―	草鞋	拝む。
		男	立	前	A	―	草履	
		女	立	横	B	―	?	
		女	歩	前	A	―	裸足	
		男	歩	前	A	―	裸足	
		男	歩	下	B	?	?	
		女	立	前	?	―	草履	
		尼	歩	前	C	―	?	
		子	歩	後	B	―	?	稚児。
		男	立	横	A	―	?	
		男	立	前	A	―	?	
		男	歩	横	A	扇子	?	手に持つ。

	女	立	?	A	−	?	
	子	走	前	A	−	裸足	
	女	歩	前	A	−	?	
	女	歩	前	A	−	?	
	男	走	前	B	−	?	
	尼	歩	前	A	−	?	
	尼	歩	下	A	−	?	老婆。
	女	歩	前	A	−	?	
	僧	歩	前	A	笠	?	背負う。
	男	歩	前	A	−	?	
	男	歩	前	B	−	?	
	女	歩	?	?	−	裸足	
	女	歩	下	?	−	裸足	
	女	歩	?	A	−	裸足	
	男	歩	前	A	扇子	裸足	手に持つ。
150	男	歩	前	A	数珠	裸足	手に持つ。
	男	歩	前	B	−	?	
	男	歩	後	B	−	裸足	
	女	歩	後	B	−	?	
	女	歩	前	A	−	草履	
	女	歩	後	?	−	?	
	子	歩	前	A	傘・扇子	裸足	傘はかたぎ、扇子は手に持つ。稚児。
	僧	歩	前	A	−	裸足	
	男	歩	前	B	−	?	
	子	歩	前	A	傘	?	かたぐ。稚児。
	男	歩	横	B	太刀	草鞋	腰にさす。
	男	歩	下	B	−	裸足	
	尼	歩	前	A	−	草鞋	
	女	歩	横	B	−	?	
	男	立	前	A	扇子	?	手に持つ。
	男	立	前	A	扇子	?	手に持つ。
152	僧	立	前	A	−	?	
163	僧	歩	後	B	−	?	
164	男	歩	前	B	荷	裸足	背負う。
	男	歩	後	B	弓・太刀	草鞋	弓はかたげ、太刀は腰にさす。
	僧	歩	前	B	?	草履?	背負う。子供。
	僧	歩	前	B	琵琶	下駄	背負う。
	僧	立	前	A	−	?	
	男	立	横	A	−	?	

		女	立	横	?	−	草履?	
		女	立	前	A ?	−	?	
	165	男	歩	横	B	笈	?	背負う。
		僧	立	前	C	−	?	
	167	尼	立	前	A	扇子	裸足	手に持つ。
	168	男	歩	前	C	−	裸足	
		男	立	横	B	棒	裸足	手に持つ。
		男	歩	横	?	棒	裸足	唐櫃をくくった棒を2人でかつぐ。
		僧	歩	前	B	棒	裸足	唐櫃をくくった棒を2人でかつぐ。
		男	歩	後	B	棒	裸足	唐櫃をくくった棒を2人でかつぐ。
		子	歩	上	?	−	裸足	
		女	歩	後	C	箱	?	頭上運搬。
		女	走	前	B	桶	?	頭上運搬。
		女	歩	前	C	桶	?	頭上運搬。
	169	男	歩	横	C	−	下駄	
		女	歩	横	C ?	子供	下駄	前で抱く。
		女	歩	前	C	団扇	下駄	手に持つ。
	170	男	立	?	B	棹	?	手に持ち、さす。船頭。
		男	歩	前	B	女	?	背負う。
		男	立	?	A	棹	?	手に持ち、さす。船頭。
巻7	177	男	立	横	B	棹	裸足	手に持ち、漕ぐ。
	178	男	歩	前	B	荷	裸足	背負う。
		男	歩	前	B	蓑	?	背負う。
		男	歩	前	B	太刀	裸足	かたぐ。
		男	歩	後	A	棒状の荷	?	かたぐ。
	179	男	立	前	B	荷	裸足	手に持ち、手渡す。
		男	立	下	B	たずな	裸足	手に持つ。
		子	歩	横	B	太刀	裸足	腰にさす。稚児。
		男	歩	前	A	太刀	?	腰にさす。
		尼	歩	前	A	−	?	
		女	歩	前	?	−	草履	
		男	立	前	A	扇子	草履	手に持つ。
	180	僧	立	横	B	扇子	草履	手に持つ。
		僧	立	前	A	扇子	?	手に持つ。
		僧	立	前	A	−	下駄	
		僧	立	前	A	扇子	下駄	手に持つ。
	185	子	立	前	A	太刀・団扇	?	太刀は腰にさし、団扇は手に持つ。稚児。
		僧	立	前	A	−	?	
		男	立	前	A	傘・扇子	草履	共に手に持つ。

	女	歩	前	A	－	?	
	女	歩	後	A	－	?	
	男	走	前	B	－	?	
	男	走	前	B	－	裸足	
	男	走	前	B	－	裸足	
	女?	歩	前	B	荷	?	頭上運搬。
	子	走	前	B	－	裸足	稚児。
186	子	走	前	B	棒	裸足	手に持つ。稚児。
	子	歩	横	B	－	?	稚児
	子	歩	前	B	－	裸足	稚児。
	男	立	前	C?	扇子	?	手に持つ。
	子	立	下	B	太刀	裸足	手に持つ。
	女	立	前	?	－	?	
	子	立	横	A	柄	裸足	牛車の柄を持つ。稚児。
	子?	立	?	B	?	裸足	? 稚児?
187	僧	立	前	A	－	?	
	子	立	前	B	団扇	裸足	手に持つ。
	男	立	前	A	扇子	草履?	手に持つ。
	僧	立	前	A	－	?	
	僧	立	前	A	傘	草履?	かたぐ。
	僧	立	前	A	扇子	草履	手に持つ。
	男	歩	前	B	荷	裸足	背負う。
	男	歩	下	C	柄	裸足	輿の柄を持つ。
	男	歩	下	B	柄	裸足	輿の柄を持つ。
	男	歩	前	A	－	草履	
	男	歩	後	B	柄	裸足	輿の柄を持つ。
	男	歩	下	B	柄	裸足	輿の柄を持つ。
	男	歩	下	B	柄	裸足	輿の柄を持つ。
	男	歩	後	B	扇子	裸足	手に持つ。
	男	歩	前	A	弓矢	?	弓は手に持ち、矢は背負う。
	男	歩	後	A	弓矢	?	弓は手に持ち、矢は背負う。
	男	歩	前	A	－	草履	
	男	歩	前	A	－	草履	
	男	歩	横	B	－	草履?	
	男	歩	前	B	－	?	
188	男	歩	前	B	太刀	?	かたぐ。
	男	歩	前	A	－	裸足	
195	女	立	前	A	桶	裸足	腕にささげる?
	女	立	前	A	桶	裸足	腕にささげる?
	男	立	横	?	－	裸足	

	尼	立	前	A	扇子	?	手に持つ。
	男	立	前	A	扇子	草鞋?	手に持つ。
	僧	立	前	A	−	下駄	
	僧	歩	横	B	鉦	裸足	手に持ち、踊る。
	僧	歩	下	B	鉦	裸足	手に持ち、踊る。一遍？
	僧	歩	下	B	−	裸足	踊る。
	僧	歩	前	B	−	裸足	踊る。
	僧	歩	上	B	−	裸足	踊る。
	僧	立	前	A	扇子	草履?	手に持つ。
	僧	立	下	A	扇子	下駄	手に持つ。
196	男	立	横	B	傘	裸足	手に持つ。
	男	立	前	A	扇子	?	手に持つ。
	女	歩	前	A	−	裸足	
	僧	歩	前	A	傘・団扇	?	傘はかたげ、団扇は手に持つ。
	僧	歩	横	B	−	下駄	
	僧	立	前	A	団扇	裸足?	手に持つ。
	男	立	前	A	−	裸足	
	男	歩	前	A	団扇	裸足	手に持つ。
	僧	歩	前	A	たずな？	裸足	手に持つ？
	男	歩	前	B	傘・笈	裸足	傘はかたげ、笈は背負う。
197	男	歩	前	A	綱	裸足	筏の綱を後向きに引く。
	男	歩	前	B	綱	裸足	筏の綱を前向きに引く。
	男	歩	前	B	綱	裸足	筏の綱を前向きに引く。
	男	歩	前	A	綱	裸足	筏の綱を後向きに引く。
	男	歩	前	B	綱	裸足	筏の綱を後向きに引く。
	男	歩	前	B	綱	裸足	筏の綱を後向きに引く。
200	女	歩	?	?	−	?	
	女	立	上	A	−	?	
	僧	立	前	B	−	?	
	僧	立	横	?	扇子	?	手に持つ。
201	女	立	前	A？	−	?	
	僧	立	前	B	−	?	
	子	歩	後	C	手	裸足	母？の手をとる。
	女	歩	前	B	手	?	子の手をとる。
	男	歩	前	A	−	?	
	女	歩	前	A	−	草鞋?	
	女	立	前	A	−	?	
	子	立	前	A	−	裸足	
	男	歩	前	B	蓑	裸足	背負う。
	男	歩	前?	B	蓑	裸足	背負う。

		男	歩	前	B	蓑	裸足	背負う。
		子	歩	前	A	木の枝	裸足	手に持つ。
		女	歩	前	A	傘	草履	かたぐ。
		男	歩	前	A？	団扇	草履	かたぐ。
		男	歩	前	A	弓	裸足	かたぐ。
		男	歩	前	B	蓑	裸足	背負う。
		男	歩	前	A	団扇？	裸足	手に持つ。
		女	歩	後	B	笠	草鞋	手に持つ。
巻8	204	男	歩	前	B	弓	裸足	かたぐ。
		男	歩	後	B	弓・太刀	裸足	弓はかたぎ、太刀は腰にさす。
		男	歩	前	B	たずな	裸足	手に持つ。子供か。
		男	歩	前	B	荷ない棒	裸足	肩で荷なう。棒には藁束を下げる。
		僧	立?	前	B	荷	裸足	背負う。
		僧	歩	前	B	荷	裸足	背負う。
		僧	立	横	A	－	裸足	
		僧	歩	前	B	－	裸足	縁に上がろうとしている。
		僧	立	前	B	－	裸足	中を覗き込む。
		僧	歩	前	B	笠	裸足	手に持つ。
		僧	歩	前	B	－	裸足	
	215	女	歩	前	A	箱	草履	頭上運搬。
		女	歩	？	A	箱	？	頭上運搬。
		男	歩	前	B	団扇？	？	手に持つ。
		女	歩	前	B	杖？	？	手に持ってつく？
		子	歩	前	B	－	裸足	母？の手をとろうとする。
		女	立	後	A	－	裸足	子供の手をとろうとする。
		男	歩	下	B	箱	？	肩でかつぐ。
		女	立?	前	A	－	草履	
		僧	立	前?	A	－	下駄	
		男	立	前	B	－	裸足	後からかぶさる老人の手をとる。
		女	立	前	A	－	草履	
		女	立	横	？	－	草履	
		僧	歩	下	B	琵琶・杖	下駄	琵琶は背負い、杖は手に持ちつく。
	216	男	走	前	B	笠・太刀	草履	笠はかたぎ、太刀は腰にさす。
		僧	立	前	A	－	？	
		僧	歩	前	B	荷ない棒	裸足	肩でになう。棒には箱をくくる。
		男	歩	下	B	荷ない棒	裸足	肩でになう。棒には旅荷をくくる。
		尼？	歩	前	A	－	？	
		女	歩	前	A	－	？	
		尼	歩	前	A	－	草履	
		尼	歩	前	A	－	草履	

	女	走	前	B	—	草履	
	女	歩	後	?	—	草履	
	女	立?	前	A	—	?	
	女	歩	前	B	笠	草履	手に持つ。
	男	立	横	B	—	草履	
	僧	走	前	B	—	裸足	かたぐ。
	男	走	前	B	数珠	裸足	手に持つ。
	僧	歩	前	C	—	裸足	子供。
	僧	歩	前	A	笠	裸足	背負う。子僧の手を引く。
	女	走	前	B	—	草履	
	女	走	前	B ?	—	草履	
	僧	立	横	A	—	草履	
	僧	立	上	B	—	裸足	子供。
	尼	立	上	A	—	?	
	女	立	上	A	—	?	
	女	立	上	A	—	?	
	女	立	上	?	—	?	
	僧	立	後	A	—	草履	
	男	立	前	B	—	裸足	
	尼	立	前	A	—	?	
	女	立	横	A	—	草履	
	女	立	前	?	—	?	
	尼?	立	横?	A	—	?	
221	僧	立	前	A	—	?	
	子	立	前	A	—	裸足	稚児。
	僧	立	前	A	—	草履	
227	女	歩	下	B	杖	草鞋?	手に持ちつく。老婆。
230	女	歩	下	B	—	草履	子供。
	女	歩	前	A	—	裸足	
	男	歩	下?	B	団扇	裸足	
	僧	歩	前	B	杖	草履	手に持ち、つく。老人。
	女	立	横	B	桶	裸足	頭上運搬。覗き込む姿勢。
	女	立	横	B	桶	裸足	頭上運搬。覗き込む姿勢。
	男	歩	上	B	棒	?	櫃の棒をかつぐ。
	男	歩	下	B	棒	裸足	櫃の棒をかつぐ。
	女	歩	前	A ?	—	?	
	男	歩	後	B	—	裸足	
	女	立	後	A	—	草履	
	男	立	前	B	—	?	
	僧	立	横	?	—	?	

		男	立	前	B	鉢	裸足	両手で持ち、差し出す。
		女	立	前	A	笠	?	背負う。
		女?	立	前?	?	箱	?	頭上運搬。
		僧	立	下	B	桶	裸足	両手で持ち、差し出す。
		僧	立	前	B	椀	裸足	両手で持ち、差し出す。
		僧	立	前	B	−	?	
巻9	237	男	走	前	B	柄杓?	?	かたぐ。
		男	走	前	B	太刀	?	手で持つ。
		男	立	前	B	弓	?	手で持つ。
		男	歩	後	B	荷ない棒	裸足	かたぐ。棒には桶をくくる。
		男	歩	下	B	荷ない棒	裸足	かたぐ。棒には桶をくくる。
	238	尼	立	前	A	−	裸足	
		女	歩	前	A	子供	裸足	背負う。
	245	僧	歩	後	B	松明	草履?	手に持つ。
		僧	歩	前	A	椀	草履	手に持つ。草履は足半?
		僧	歩	前	B	棒	草履	輿の棒を持つ。草履は足半?
		僧	走	前	B	棒?	草履	手に持つ。草履は足半?
		僧	歩	前	B	棒	草履	輿の棒を持つ。草履は足半?
		僧	歩	前?	C?	数珠	裸足	手に持つ。
		僧	歩	前	B	−	裸足	一遍?
		僧	歩	前	A	−	?	
		僧	歩	前	A	−	?	
		僧	走?	前	B	−	?	
	248	男	歩	後	B	太刀	?	手に持つ。
		僧	歩	後	B	−	草履?	
		男	歩	前	A	扇子	?	手に持つ。
		子	歩	後	B	太刀	裸足	かたぐ。稚児。
		男	歩	後	B	−	草履	
		僧	歩	前	B	−	?	
		女	歩	前	A	−	?	
		女	歩	?	B?	−	?	
		男	歩	前	B	−	?	
巻10	265	男	歩	後	A	−	裸足	
		男	歩	後	B	−	裸足	
	267	男	歩	前	B	鉾	?	舞楽を舞っている。
		男	立	横	B	鉾	?	舞楽を舞っている。
		男	立	前	C	鉾	?	舞楽を舞っている。
		男	立	前	B	鉾	?	舞楽を舞っている。
	268	女	歩	前	A	−	?	
		男	歩	前	A	−	靴?	

		男	歩	前	B	－	裸足	
		男	歩	前	A	－	裸足	
		男	歩	前	A	－	裸足	
		男	歩	前	A	－	裸足	
		男	歩	横	B	－	裸足	
		男	歩	前	A	太刀	裸足	かたぐ。
		男	歩	前	B	－	裸足	
		男	走	前	A	－	裸足	
		僧	歩	上	A	－	?	
	270	男	立	前	B	櫓	?	手に持ち、漕ぐ。船頭。
		男	立	横	B	櫓	裸足	手に持ち、漕ぐ。船頭。
		男	立	後	B	櫓	裸足	手に持ち、漕ぐ。船頭。
		男	立	前	B	櫓	裸足	手に持ち、漕ぐ。船頭。
	272	男	立	横	B	櫓	?	手に持ち、漕ぐ。船頭。
	273	女	歩	横	B	－	?	舞を舞っている。
		女	歩	横	B	－	?	舞を舞っている。
		女	歩	横	B	－	?	舞を舞っている。
		女	歩	前	B	－	?	舞を舞っている。
	282	女	歩	前	A	－	草履	
		女	歩	前	A	－	?	
		男	?	横	A	－	?	
		男	歩	前	B	－	草履?	
		女	歩	前	A	数珠	草履	手に持つ。
		女	立	横	B	－	?	
		女	立	前	A	－	草履	
		女	立	前	A	－	草履	
巻11	291	男	立	後	B	櫓	?	手に持つ。船頭。
		男	立	後	B	櫓	裸足	手に持ち、漕ぐ。船頭。
	294	僧	歩	前	B	－	裸足	踊っている。
		僧	歩	横	B	－	裸足	踊っている。
		僧	歩	下	B	鉦?	裸足	鉦叩いて?、踊っている。
		僧	歩	下	B	－	裸足	踊っている。
		僧	歩	横	B	鉦?	裸足	鉦叩いて?、踊っている。
		僧	歩	前	B	鉦?	裸足	鉦叩いて?、踊っている。
		僧	歩	下	B	－	裸足	子供。
		僧	歩	横	B	－	裸足	
		女	歩	前	A	－	?	
		女	歩	前	A?	－	?	
		男	歩	前	B	棒	裸足	かたぐ。
		男	歩	前	B	傘	?	かたぐ。

298	女	走	前	B	―	裸足	
	女	歩	横	A	―	草履?	
	女	歩	前	A	―	草履	
299	男	立	下	B	紙	裸足	紙の端を持ち、一遍に揮毫してもらってる。
	女	歩	前	A	子供	草履	前で抱く。
	男	歩	前	B	傘	?	かたぐ。
	子	歩	下	B	―	裸足	
303	男	歩	前	B	蓑	?	背負う。
	男	歩	下	B	蓑	?	背負う。
	男	歩	前	A	棒	?	かたぐ。棒の先には笠状のものがある。
	男	歩	下	B	船綱	?	引く。
	僧	歩	下	B	船綱	?	引く。
	男	歩	下	B	船綱	?	引く。
	男	歩	前	B	船綱	?	引く。
	僧	歩	後	B	船綱	?	引く。
	男	歩	後	B	船綱	?	引く。
305	男	歩	前	B	船綱	?	引く。
	男	歩	前	B	船綱	?	引く。
	男	歩	?	B	船綱	?	引く。子供か。
	男	歩	下	B	船綱	?	引く。
	男	歩	下	B	船綱	?	引く。
	僧	歩	前	B	船綱	?	引く。
	男	歩	前	B	船綱	?	引く。
	僧	歩	横	B	船綱	?	引く。
	僧	歩	下	B	船綱	?	引く。
306	男	走	前	B	弓	?	かたぐ。
	男	走	前	B	太刀	裸足	かたぐ。
311	女	歩	前	B	杖	草履	手に持ち、つく。老婆。
	女	歩	前	A	―	?	
	男	歩	前	A	笠	裸足	手に持つ。
330	男	立	前	A	弓	裸足	手に持つ。
	男	立	横	A	弓	?	手に持つ。
	男	立	下	B	―	裸足	遺体を拝む。
	女	立	前	A	―	?	
	女	立	横	?	―	?	
	尼	立	前	A	―	?	
333	僧	走	前	B	―	裸足	
	男	立	前	A	棒	裸足	梶の棒を持つ。船頭。

334	男	立	後	B	櫓	裸足	船頭。
	僧	立	下	B	―	裸足	入水しようとする。
	僧	立	前	B	―	裸足	入水しようとする僧を止める。

表2　一遍上人絵伝における人物の運搬法

		かたぐ	荷なう	背負う	手に持つ	頭上運搬	その他
立前A	男 46	1	0	2	10	0	3
	女 21	0	0	0	7	1	2
計	67	1	0	2	17	1	5
立前B	男 27	0	0	0	12	0	3
	女 3	0	0	0	0	0	0
計	30	0	0	0	12	0	3
立前C	男 3	0	0	0	1	0	0
	女 2	0	0	0	0	0	0
計	5	0	0	0	0	0	0
歩前A	男 88	5	0	5	14	0	4
	女 40	1	0	2	4	4	2
計	128	6	0	7	18	4	6
歩前B	男 90	11	5	23	23	0	1
	女 7	0	0	0	3	0	0
計	97	11	5	23	25	0	1
歩前C	男 7	0	0	0	0	0	0
	女 3	0	0	0	1	1	0
計	10	0	0	0	1	1	0

以上の内、踊りなど特別な動作等の人数は立前B10人、立前C１人、歩前A２人、歩前B15人である。